

第 182 回 雪どけと第三世界

1 スターリンの死と平和共存

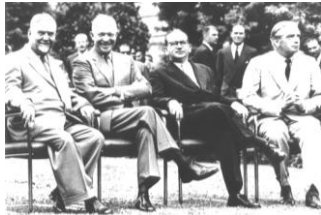
- ・ 1953 年、独裁者として君臨してきた（ ）した。
→ソ連は有力者による集団指導体制（トロイカ体制）に入った。
→徐々にフルシチョフによる指導体制が確立していった。



フルシチョフ
スターリンの死後、
マレンコフやブルガ
ーニンを抑えて最
高権力者となった。

- ◆（ ）（在任 1953～1964 年）
 - ・ 1955 年、ソ連・米・英・仏の首脳が（ ）を行った。
 - ・ 1955 年、ユーゴスラヴィアと和解し、西ドイツと国交を結んだ。
 - ・ 1956 年、（ ）で（ ）を行った。
→西側（資本主義諸国）との（ ）を打ち出した。
→さらに（ ）も行われた。
 - ・ 1959 年、（ ）して、キャンプ=デーヴィッドでアイ
ゼンハワー大統領と会談した。

※冷戦の対立が緩和されたことを、「 」という。



ジュネーヴ4巨頭会談

左からブルガーニン
(ソ)、アイゼンハワー
(米)、フォール(仏)、
イーデン(英)。
具体的な成果は無か
ったが、「雪どけ」を象
徴する会談となった。



人工衛星スプートニク1号

1957 年、ソ連が人工衛星
の打ち上げに成功したこ
とは、スプートニク=ショ
ックと言われた。ソ連が
大陸間弾道ミサイルの開
発で優位に立っているこ
とははっきりとした。



フルシチョフ訪米

アイゼンハワー
(左)と談笑するフル
シチョフ(右)。ソ連
の最高指導者として
初めて訪米した。
ちなみに夫人と子
供も一緒に行った。

2 スターリン批判の衝撃

- ・ フルシチョフによるスターリン批判は、東欧諸国に動揺を与えた。
- ・ 中国はスターリン批判と平和共存政策に反発し、（ ）が始まった。
→独自路線をとっていたアルバニアは中国を支持したため、ソ連と断交した。

- ・ 1956 年、（ ）西部の都市（ ）で、民衆が自由化や民主
化を求める反政府反ソ暴動が発生した（ポズナニ暴動）。
→（ ）が強引にこれを收拾し、ソ連の介入を防いだ。
- ・ 1956 年、（ ）の首都ブダペストで、反ソ暴動が発生した。
→（ ）が首相となり、民主化などを約束した。
→しかしソ連軍がハンガリーに侵入し、暴動は鎮圧された。



ポーランドのゴムウカ

元は工場の労働
者。大戦中は、ポ
ーランドで反ドイツ
運動を行っていた。
政敵の粛清などから、「小スター
リン」と呼ばれた。



ハンガリー反ソ暴動



暴動からソ連軍の介入
までを、ハンガリー事
件と言う場合がある。
写真は破壊されたスタ
ーリン像や、社会主義
のマークがくり抜かれ
たハンガリーの国旗。



ハンガリーのナジ=イムレ

ハンガリー事件の際
に首相を務めたが、
介入したソ連によっ
て逮捕連行され、反
逆罪を理由に絞首
刑となった。なお姓
がナジである。

3 第三世界の成立

・米ソの冷戦が続くなかで、独立を果たしたアジアやアフリカの国々は、米ソのどちらにも属さない（ ）の形成をめざした。

- ・1954年、（ ）で、アジア=アフリカ会議の開催が提唱された。
- ・1954年、インドの（ ）首相と中国の（ ）首相が会談した。
→領土主権の相互尊重、内政不干渉、平和共存など（ ）を発表した。

- ・1955年、インドネシアの（ ）で、（ ）が開催された。

→（ ）が発表された。



周恩来とネルー

このころには良好な関係だったが、中国とインドは、1959年に降チベットを巡って争うようになり、中印国境紛争へと発展した。現在でも未解決である。

平和十原則(1955年)

青字：五原則を継承

- | | |
|----------------|----------------|
| ①基本的人権と国連憲章の尊重 | ②主権と領土保全の尊重(①) |
| ③人類と国家間の平等(④) | ④内政不干渉(③) |
| ⑤単独・集団の自衛権尊重 | ⑥大国有利の集团的防衛排除 |
| ⑦武力侵略の否定(②) | ⑧国際紛争の平和的解決(⑤) |
| ⑨相互の利益・協力促進 | ⑩正義と国際義務の尊重 |

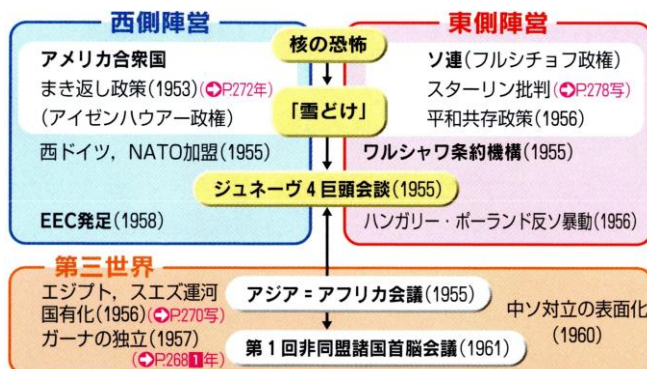
- ・1961年、ユーゴスラヴィアの（ ）で、（ ）が開催された。

→アジア、アフリカ、ラテン=アメリカ諸国が参加し、結束を強めた。『雪どけ』の構図

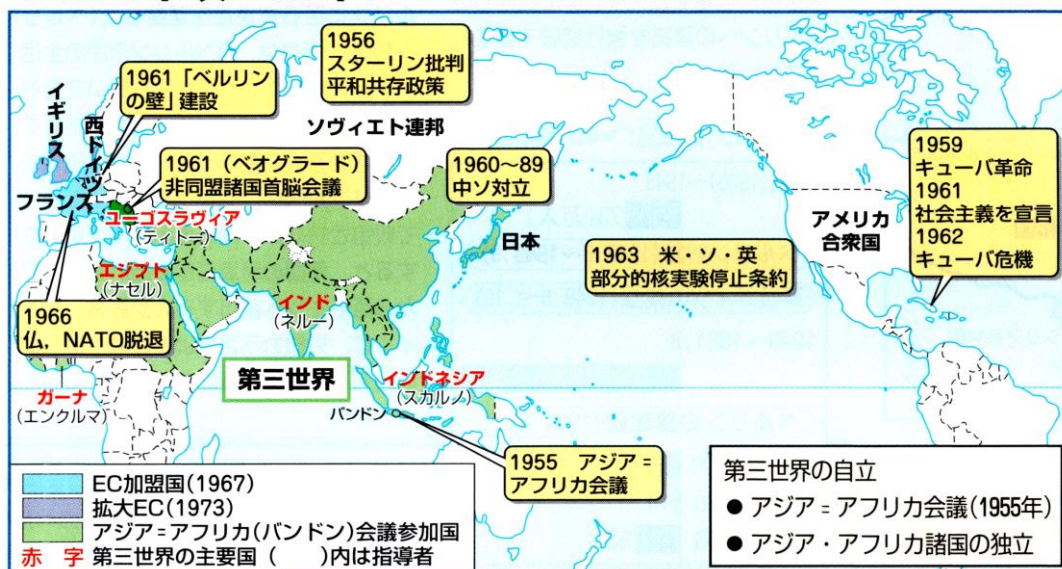


非同盟諸国首脳会議

左からネルー(インド)、エンクルマ(ガーナ)、ナセル(エジプト)、スカルノ(インドネシア)、ティトー(ユーゴスラヴィア)。この時代を代表するビッグネームばかりである。この写真で大問ひとつ作れる。



B 1955年頃～90年(第三世界の台頭・冷戦後期)



- ①冷戦の激化にともない、「核」戦争の脅威が世界に拡大
- ②ソ連の「平和共存」政策などにより大国間に協調ムードが高まり、「雪どけ」の機運が生まれる(米ソの軍拡は続く)
- ③アジア・アフリカ諸国を中心に、東西両陣営のいずれにも属さない**第三世界**が形成される
- ④米ソの影響力低下にともない、中ソ対立、英・仏・中の核保有、フランスの対米離反、欧州共同体の発展、西独・日本の成長、第三世界の結束強化などが進行